

# 戦後古典教育実践史の研究 (19)

—佐野泰臣氏の漢文教育の場合—

渡 辺 春 美

はじめに

戦後古典教育実践史研究の一環として、漢文教育を取り上げたい。漢文教育の現状については、学習指導要領における古典軽視、現代社会における古典への興味・関心の低下、現代社会全体の活字離れの傾向が進む中で、衰退の一途をたどっていると見える。漢文教育はどのような意義のもとに、どのような方法によって行われ、何をもたらしたのであるか。今日、戦後五〇有余年にわたって営まれた漢文教育の実際を史的に考察することは、意義在ることと考える。ここでは、後に掲げる佐野泰臣氏の漢文教育の二冊の著書『漢文教育考—その指導と実践—』（注1）、『漢文の教え方—指導・実践の方法—』（注2）を取り上げて考察したい。佐野泰臣氏の授業実践は、昭和四〇（一九六五）～一九七四）年代、昭和五〇（一九七五）～一九八四）年代に行われている。

佐野泰臣氏の実践に重なる昭和四〇年代は、古典教育が活性化し多様化した時期である。一九六九年（中学校）、一九七〇年（高等学校）には、学習指導要領が改訂され、古典教育の重視が打ち出された。この方向

は、古典教育に携わる者に大きくは二つの問題意識をもたらしたと見える。すなわち、古典教育の意義・目標に関する問題意識と、古典教育の方法に関する問題意識である。前者については、学習指導要領に「偏狭なナショナリズム」を見出し、批判する動きもあり（注3）、古典重視が日本精神陶冶のための古典教育におちいることを危惧する意識とも連なっていた。また、四〇年代には、環境破壊、人間疎外、主体喪失などの深刻な状況が生じた。それは、学校教育を問い直し、変化、改善を求めた。心ある指導者は、古典教育においても、人間を追求し、人間性に触れる教育を模索した。そのような模索が活性化と多様化の背景の一つとなっていると考える。

昭和五〇年代は、教育において、その基盤を揺るがす事件が多発した時代であった。四〇年代末に高校進学率は九〇パーセントを越え、大学への進学率も伸びた。学校格差が歴然とし、難関校を目指した予備校通い、塾通いをする生徒が増大し、それは中学・小学校にも及んだ。三無主義と言われる状態が生徒に現れる一方で、校内暴力、不登校、いじめ、落ちこぼれ問題が生じ、大きな社会問題となったのもこの時期である。このような五〇年代において、古典教育は、一方では受験を目指してなされ、もう一方では生徒の古典離れや学力の不足のために授業の存立すら危うい状態にあった。

このような時期にあって、佐野泰臣氏は、漢文教育に何を求め、それをどのように実践しようとしたのであろうか。以下、二冊の著書に基づいて考察していくことにする。

## 一 佐野泰臣氏の紹介

### (一) 佐野泰臣氏の略歴

佐野泰臣氏の略歴は、次のようである。

一九四三年 中国遼寧省瀋陽(旧満州国奉天市)において、佐野豊・武子の四男として生まれる。終戦後、徳島県に引き上げ、石井小学校、石井中学校、徳島県立名西高等学校卒業。一九六五年、立命館大学文学部(中国文学専攻)卒業。京都府立北桑田高等学校を経て、徳島県立海南高等学校、徳島県立鳴門高校、徳島県立城北高等学校教諭を勤める。漢文教育により、財団法人康楽会賞、第二十八回読売教育賞国語教育部門、第十九回徳島新聞賞教育賞等を受賞する。主著に『漢文教育考―その指導と実践―』(一九八〇年十月 教育出版センター刊)、『へ教え方叢書』⑫漢文の教え方―指導・実践の方法―』(一九八四年十一月 右文書院)、『ものぐさ漢文88』(一九八六年十二月 右文書院刊)、『漢文の世界』(一九八九年七月 徳島県教育会刊)、『漢文百話』(一九九七年九月 右文書院刊)などがある。

### (二) 佐野泰臣氏の著書

漢文教育に関する二冊の著書の内容は、次のとおりである。

#### 1 『漢文教育考―その指導と実践―』

「まえがき」・「あとがき」の他、資料(一)～(三)を除く構成は、次のとおりである。

### 第一編 漢文教材の指導方法

- 一 入門期教材の指導法
- 二 漢詩教材の指導法
- 三 歴史教材の指導法
- 四 散文教材の指導法
- 五 思想教材の指導法

## 第二編

- 一 古典Ⅱと漢文
- 二 同和教育関連的指導と漢文
- 三 放送教材利用学習と漢文
- 四 漢文の指導形態・指導方法
- 五 漢字学習と漢文

## 第三編 漢文教育の考察

- 一 中学校漢文と高校漢文について考える
- 二 漢文と他教科との関連について考える
- 三 日本漢文教材について考える
- 四 漢文教材中の現代文、古文について考える
- 五 国語Ⅰと漢文について考える

第一編については、「漢文の、入門、漢詩、歴史、散文、思想の五教材の指導内容、指導方法とその実践例をまとめてみた。」とし、第二編では、「広い視野に立って漢文指導を発展させたものとして、同和教育関連的指導、放送教材利用学習などの例を述べてみた。」と説明している。第三編では、「中学校漢文と高校漢文について、漢文と他教科の関連など、今後の漢文教育の問題をささやかながら提言してみた。」(以上、注4)と述べている。

## 2 『漢文の教え方―指導・実践の方法―』

二冊目の著書である。本書の構成は、「はしがき」を除けば、次のとおりである。

## 総論

第一章 高校漢文の現状／第二章 漢文指導の克服点／第三章 漢文の指導方法の改善／第四章 生徒の自立・主体性の確立をめざして／第五章 中学校古典（漢文）と高校古典（漢文）／第六章 漢文と他教科・日本漢文教材について

## 各論

第一章 入門期教材とその指導／第二章 歴史教材とその指導／第三章 漢詩教材とその指導／第四章 散文教材（含む辞・賦）とその指導／第五章 思想教材とその指導／第六章 高校一、二年、三年の漢文授業

本書は、前著『漢文教育考―その指導と実践―』に基づき、実践事例を加え、整理、発展させたものである。随所に前著との重なりも見出される。

「総論」については、佐野泰臣氏の「二十年間の漢文の指導と実践の記録であり」、「その後の研究の成果をまとめたものである。漢文授業では旧態依然とした板書による講義式の方法が多く、それが生徒たちの意欲を失わせることになっているのではないか。生徒たちが自主的、主体的に漢文教材を理解、鑑賞するためにはどのような授業形態や指導の方法があるのか。生徒に漢文を教えるだけでなく、生徒自ら漢文を学ぶようにする、教師中心から生徒中心に授業を変化して、生徒たちが生き生きと活動する方法はないのか。そういう点での実践であり、参考に成ればと考えている。」としている。「各論」では、「漢文の授業でそれぞれの教材をどのように指導すれば、生徒たちの興味や関心をよび起こし、学習意欲を高めてゆき、指導の効果

を上げることができるのか。その基本となる事例を中心にまとめてみた。」(以上、注5)と述べている。

## 二 佐野泰臣氏の漢文教育観

### 1 漢文教育観

佐野泰臣氏の漢文教育観は、次の文章によってとらえられる。

漢文をわが国の古典として大事に扱うのは、漢文が日本文化の源流といえるためであり、日本人の伝統的な心情を築き上げる基盤、すなわち日本の古典を生み出す基盤となったからである。高校生は、漢文を自ら作る必要はないが、漢文を読解することはぜひとも必要なのである。それは、漢文の伝来により、日本の言語や文学、思想などに多大の影響を与え、日本人の心情や精神の背骨となり、重要な古典、記録を残すための手段ともなったからである。そこで、日本や中国の過去の言語・文化・思想などを正しく理解し、現在の言語・文化・思想などを十分に把握し、豊かな心を育ててゆくためにもどうしても漢文に対する知識や教養が必要となってくるのである。『枕草子』や『源氏物語』などの日本の古典が大切なように、漢文はそれ以上に大切にしなければならない日本の古典といえるのである。日本の言語・文学・思想などの源流の一つは、中国文化を伝えた漢文の力によるものであり、漢文の知識や教養がなければ、日本のそれらを本当に理解することはできないのである。

ここに漢文学習の意義と目的がある。

（『漢文教育考―その指導と実践―』「まえがき」）

漢文教材には漢詩・歴史・散文・思想の四教材があり、どれ一つをとりあげても、高い文芸性を備えている。それらの教材を通して、思考力・批判力を陶冶し、心情を豊かに育てる。また、人間いかにあるべきか、人間いかに生くべきか、社会とは、政治とは、国家とは、教育とは、そういう課題について、漢文は、生徒たちに大きな指針を与えるものが多く、それはまた、今後の文化の創造につながってゆくものと思われる。

（『漢文の教え方―指導・実践の方法―』五・六頁）

ここでは、漢文がア、「日本文化の源流」・「日本の古典を生み出す基盤」・「日本人の心情や精神の背骨」であるとともに、イ、「重要な古典、記録を残すための手段」であり、ウ、「高い文芸性」を備えてもいるととらえられている。ここに、佐野泰臣氏の漢文観が見出される。漢文教育はそこから導かれる。すなわち、ア、「日本や中国の過去の言語・文化・思想などを正しく理解し」、イ、「現在の言語・文化・思想などを十分に把握し」、ウ、「豊かな心を育ててゆくため」にもどうしても漢文に対する知識や教養が必要となるとし、また、エ、「思考力・批判力を陶冶し」、オ、「心情を豊かに育て」、カ、人間のあり方・生き方、政治、国家、教育の課題に指針を与え、キ、今後の文化の創造につながる、というところに、漢文教育の必要と可能性が見出されている。

佐野泰臣氏は、漢文教育への思いを、次のように述べている。

この二十年間、「漢文教育」一筋に歩んできた私を、駆り立ててきたものは何であろうか。

それは、漢文教材を生徒たちに自主的・主体的に取り組ませ、その教材を通して生徒の人間形成の糧としたい。ともすれば受験や競争の波にのまれがちで、自己を見失うことの多い生徒たちに、漢文授業を通じて、人生や社会、人間や友情などについて深く考え、ものの見方、感じ方、考え方をより高めさせたい。そのためには、旧態依然とした漢文の指導方法を改善し、生徒たちの立場になつての新しい指導方法を確立したいと考えたためである。

特に、漢文を敬遠する大きな理由に、生徒たちの心に響く有効な学習形態がとられていないことがあり、漢文を新しい時代に即応した、生徒たちが主体性をもって取り組み、自ら学ぼうとする心を育てる科目に蘇生させたかったのである。（『漢文の教え方―指導・実践の方法―』 三・四頁）

ここからは、昭和四〇（一九六五）―一九七四）・五〇（一九七五）―一九八四）年代の時代状況・教育状況から生み出された、「受験や競争の波にのまれがちで、自己を見失うことの多い生徒たち」の「人間形成の糧」とすべく、「漢文を新しい時代に即応した、生徒たちが主体性をもって取り組み、自ら学ぼうとする心を育てる科目に蘇生させた」とする熱意が伝わってくる。



### 三 佐野泰臣氏の漢文教育の方法

#### 1 漢文教育の現状把握

##### (1) 教育課程における漢文の現状

佐野泰臣氏は、戦後の学習指導要領等を検討し、漢文教育の現状を把握することを試みた(注6)。すなわち、一九四七(昭和二二)年五月七日に出された「新制高等学校の教科課程に関する件」(通達)と一九四八・一九四九年の改訂、一九五一(昭和二六)年、一九五五(昭和三〇)年、一九六〇(昭和三五)年、一九七〇(昭和四五)年、一九七八(昭和五三)年の学習指導要領に触れ、漢文の置かれた位置を考察している。通達とその教育課程の改訂により、「戦前に比べて、漢文は国・漢という単独教科の扱いから遠ざかり、まことにあいまいなものとなっていった。」とした。一九六〇年の改訂では、「古文と漢文が一本化して古典となり、教科として科目として存在した名称『漢文』は、事実上ここで消えてしまった。」と指摘した。『学習指導要領』が改訂されるたびに、国語科の立場というものが、各教科の中心的存在ではなく、大層窮屈な状態におかれ、その中でも漢文は軽視され続けてきたと言えよう」と述べている。一九七八年の改訂についても、漢文は実質一単位程度に追いやられていることに言及し、「そのため、国語科の教師の中からも、古典では古文は大切であるが、漢文はそれほどやらなくてもよいとか、漢文の時間数も現代文にまわした方が大学受験のために適切である、というような意見が出るほどである。また、生徒たちの意識も低調で、漢文はそれほど大切な科目でもないし、大学受験にも、あまり必要な科目ではないから、そんなに力を入れることはない。その上、漢字ばかりで内容も難解で、古臭くておもしろくなく、得るところも少ない、という悲しく

なるような批判も出てくる。」と述べている。

(2) 漢文の授業の現状

昭和四〇(一九六五)～一九七四)年代・五〇(一九七五)～一九八四)年代頃における漢文の授業の現状に  
関して、佐野泰臣氏は、次のように述べている。

複雑・多様化してゆく社会の中で、漢文がチョークと黒板を主体にする、平面的で静的な旧態依然とした授業方法に甘んじていては、漢文は社会の大きな動きにますます残され、高校生にとって  
もかびの生えた骨董趣味となってしまうであろう。(『漢文教育考』二二〇頁)

漢文においては現在でも、黒板とチョークと教科書がありさえすればそれでいい、授業の形態も  
講義式一辺倒で旧態依然としている。(同上書一四三頁)

漢文の授業の現状を、「チョークと黒板を主体にする、平面的で静的な旧態依然とした授業方法」ととらえ、  
「九十%を越す中学生が高校に入学して来る現状の中で、漢文の授業形態、指導方法は以前の選ばれた生徒  
が高校に入ってきた時代と同じものであつてはならないはずである。」(注7)と批判している。

(3) 漢文教育に関する高校生の意識

佐野泰臣氏は、海南高校普通科二六六人(二年二二八人・三年一三八人)に対し、一九六九年六月中旬に、  
鳴門高校普通科五四〇名(一年一三人名・二年二〇七人・三年二〇一人)に対し、一九七〇年六月中旬と一

九七一年三月上旬に「漢文についての意識調査」を行った。他に保護者一〇〇人に対しても行っているが、期日は定かではない。調査は、「手ごたえのない無気力な授業、あせればあせるほどそっぽをむく生徒たち、その原因をつかむために」(注8) 行ったとしている。その一部を、次に紹介する(注9)。

漢文への興味に関しては、「あまり興味を覚えなかった」が四四二人(五四・八%)、「普通です」が二三人(二九・六%)、「興味を覚えた」が一二六人(二五・六%)、となっている。この内、「普通です」「興味を覚えた」と答えた生徒に興味を持った理由を尋ねている。それによれば、生徒の興味は、漢文の深い人観(延べ人数で一二〇人)、リズムカルな表現(一〇二人)、生き生きと表現された人間像(七七人)、生き生きと表現された内容(七六人)、漢字の起源や構造の理解(六六人)に寄せられているのが分かる。生徒の好きな教材は、詩、格言・故事、歴史の順である。

「あまり興味を覚えなかった」とした四四二人の興味のない理由は、漢字・漢語への抵抗感(三二七人)、内容の難解さ(二二四人)、現代生活との関係のなさ(一六四人)、学ぶ意味のわからなさ(二五六人)、訓読法の難解さ(一一五人)他、となっている。

その他、漢文の時間数の問題(現状通りでよい―六五四人へ七三%)、漢文と漢字学習の関連(漢字学習につながる―一二二人へ四八%)、漢文の学習の意義(将来役に立つ―一〇三人へ四四%)についても、生徒、保護者にアンケートしている。佐野泰臣氏は、「その結果、漢文に対する認識は予想以上に低く、他教科・科目に比べても、漢文に対する関心や興味はすこぶる劣る」(注10)としている。

この調査をとおして、佐野泰臣氏は、①漢字・漢語・文法・訓読法に対する抵抗感をいかに取り除くか、②漢文教材の意義をいかに徹底すべきか、時間の不足をいかに補うべきかを「克服点」として挙げている(注

11)。この「克服点」は、後には、①漢字・漢語に対する生徒たちの抵抗感を、いかにとりのぞくか、②旧態依然とした講義式の授業に頼る従来の方法を脱して、生徒たちに主体性をもたせる新しい指導方法をどのように確立してゆくか、③漢文教育を地に着いたものにするためには、学校全体の中でどのように取り組むべきか、④中学校漢文との関連をどのように調整してゆくか、⑤漢文学習の中で読書指導、作文指導をどのように計画すべきか、⑥時間数不足をどのように計画すべきか、という六点として押さえている（注12）。

以上、佐野泰臣氏の、教育課程、授業、生徒の意識調査をとおした漢文教育の現状把握を見てきた。佐野泰臣氏は、教育課程の改訂による漢文軽視が教師と生徒の漢文への低調な意識を生み出したとした。また、漢文の、平面的で静的な、講義式一辺倒の旧態依然とした授業は、高校生の漢文への意欲を失わせるばかりか、高校全入時代を迎えた時代に合わないと批判した。さらに、意識調査により、生徒・保護者の意識が予想以上に低いことを把握し、漢文教育の現状克服のための六点を提示した。

## 2 漢文教育の方法

佐野泰臣氏は、「本来の授業形態は、生徒自身が読み、解釈し、まとめるといふ方向が正しいと思われる。生徒にどう読ませ、どう解釈させ、どうまとめさせるべきか、と考えるとところに授業形態・授業方法の改善への取り組みが行われるのである。」（注13）として、現代文で行われている形態や方法を取り入れ、次の方法を取り入れた授業を試みている。すなわち、（1）グループ討議（学習）による指導、（2）発表方式による指導、（3）視聴覚機器の利用による指導、（4）放送教材の利用による指導、（5）課題学習による指導、（6）自主ゼミ方式及び輪読会による指導の六つの方法である。それぞれの指導の概要は、次のとおりである（注14）。

## (1) グループ討議

歴史教材、思想教材の授業で行っている。前者では、生徒を六班に分け、各班に課題を与え、授業の折に発表させ、そこから引き出された問題点を討議し、授業のおわりに意見をまとめて発表させる。後者では、教科書教材をおえた後、思想家別にグループを作り、思想家の政治・社会・人生・学問などについての考え方を討議させている。三〇分位討議した後、各グループの主な意見を発表させ、他のグループに質問させる。

## (2) 発表方式

散文教材と思想教材に主に取り入れている。前者では、教材から一、二を選び、教師に代わって生徒のグループに前で発表させる。後者では、短い章句を選んで一人の生徒を指名し発表させるという方式である。

## (3) 視聴覚機器の利用

主にOHPを利用してしている。入門期の訓読法指導、歴史教材の指導では、人物構成、場面の展開にともなう行動と位置の変化の指導、漢詩教材では、漢詩の歴史や種類、詩型の違いの見分け方、代表的な詩人、解釈、鑑賞の指導に用いている。散文教材においても駢文の分析や思想教材の用語の指導などに利用している。

## (4) 放送教材の利用

NHKの学校放送番組を録音して利用している。一九七七年度までは年に二、三回利用、一九七八年度からは、一年生に対しては学期に一回利用し、三年生に対しては、毎月一回利用した。利用する際には、放送を聞きながら、その内容や感想を生徒自身がまとめていく「聴取メモ」を用いさせている。

## (5) 課題学習

幾つかの方法による課題学習を展開している。家庭学習のための課題として、当用漢字各自五〇字につい

て、漢字の成り立ちと意味、熟語を調べる「漢字調査」、生徒一人一つの話成語の成立や使用法、話成語を用いた短文作りなどを課題とする「話成語調べ」がある。また、漢詩指導において作者の挿話を集めて発表させる「挿話集め」、質問項目を精選してプリントして授業までの課題とする、散文教材における課題学習を行っている。

#### (6) 自主ゼミ方式及び輪読会

生徒たちがグループで自主研究を行う方法である。一九七七年度から始めている。六、七人のグループごとに唐代詩人について研究し、原稿用紙二〇枚にまとめ、週一回持ちより検討し合う。後に古代の思想家や唐宋八大家の生涯と作品についても行った。まとめたものはクラスで回覧あるいはプリントして配布している。輪読会は一九七一年度から始めている。有志二〇名と月一回、「孟子」「史記」「杜甫」「韓非子」「李白」などについて発表し、意見交換を行う。教師にとっても、生徒たちにとっても実りがあったとしている。

佐野泰臣氏は、これらの授業改善の試みは、現代文で行われている形態や方法を取り入れたとしている。しかし、佐野泰臣氏の試みは、古文の授業においても昭和四〇年代から五〇年代において次第に取り組みられるにいたった学習者の興味・関心を生かす授業、生徒の主體的活動の場として、個別学習、選択学習・グループ学習・発表による学習などを取り入れた授業(注15)ともかさなっている。

他に、佐野泰臣氏は、社会科(倫理社会・日本史・世界史)との協力、必修クラブの利用、中学校と高等学校の連携、漢文と読書指導・作文指導との関連指導など、幅広く漢文教育を模索し、可能性を追求している。

## 四 佐野泰臣氏の漢文教育の実際

### 1 歴史教材の授業の目標

佐野泰臣氏は、入門期、漢詩、歴史、散文、思想のそれぞれの教材の指導の留意点と指導目標を明確にして、授業を行っている（注16）。

ここでは、歴史教材について見ることにする。歴史教材の指導の留意点としては、①時代的背景―教材の内容とその前後の史実、時代的背景の把握、②文意をとらえる―物語の展開、登場人物の行動とその意味、および結果の理解、③解釈―省略を補い、原文に忠実に解釈、五W一Hの要点把握、④鑑賞―感じたこと、学び取ったこと、鑑賞は学習にとって大切、生徒相互で討議して意見を汲み上げることが大事、と四点を挙げている（注17）。

また、歴史教材の指導目標に関しては、次のようにとらえている。

- ①今までの基礎事項を応用し、長文の漢文を読解し、自由にものを考える態度を養う。
- ②中国の歴史に関心をもつとともに、東洋・日本に共通した政治・社会・人間のあるべき姿を追究し認識する。
- ③人々の生き方、考え方をつかみ、批判する力を身につけ、歴史観や人間観を養い、処世上の教訓を得る。
- ④すぐれた文章表現を鑑賞し、現代に生きる我々の生き方、考え方、また政治や社会のあり方を反省し、歴史と人間との関係を深く吟味する。

⑤以後も、中国の歴史やそれを材料にした文芸作品に親しむ態度を養う。

(『漢文の教え方―指導・実践の方法―』一四八頁)

## 2 授業計画

指導計画は、次のとおりである。

「鶏口牛後」(十八史略)

―発表方式による学習―

一、授業学年 高校一年

二、授業教材 「鶏口牛後」(十八史略)

三、授業計画 单元名「古代の史話(二)―乱世に生きる―」・・・五時間

一時間 十八史略について、中国の春秋戦国時代について、三教材の通読

二時間 「臥薪嘗胆」(十八史略) 前半

三時間 「臥薪嘗胆」(十八史略) 後半

四時間 「鶏口牛後」(十八史略)

五時間 「刑軻入秦」(十八史略)

(本時はその四時間目)



#### 四、本時の目標

戦国時代の遊説家蘇秦の生き方とその行動について理解し、人生のあり方を考えるとともに、漢文に慣れ、読解力をつけ、漢文に親しむ。

#### 五、本時の学習活動

発表方式による。生徒たちがグループで調べてきた内容を中心にして教師に代わり、教壇で授業をする。全文の読解を生徒たちの手で実施させる。

〔漢文の教え方―指導・実践の方法―〕 一五九―一六〇頁

### 3 授業の実際

#### (1) 「鶏口牛後」の授業の展開

「鶏口牛後」の授業は、生徒のグループ（七人）によってなされた。授業を、導入・展開・終結に整理してまとめると、次のようになる。（注17）

#### 【導入】

- ① 教師による前時の学習の確認と本時の教材の提示と進め方の指示。
- ② 生徒グループによる戦国時代の状況、諸子百家の活躍に関する説明。（司会役を置く）
- ③ グループ七人の音読につづいてクラス全体で斉読。

【展開】

④前半訳。

⑤質疑応答

ア、前半の概要。

イ、「秦国」「秦王」とせず「秦人」とした理由。

ウ、蘇秦が最初秦に行った理由。

エ、合従の説明。

オ、「寧為鶏口、無為牛後。」の説明。

カ、蘇秦の合従策が成功した理由（教師による質問）

⑥後半訳

⑦句法を中心に補足説明。

⑧質疑応答

キ、「妻不下機、嫂不為炊。」に見られる妻と兄嫁の気持。

ク、「昆弟妻嫂・・・俯伏侍敢食。」に見られる気持。

ケ、「何前倨而後恭也。」に対し「見季子位高金多也」と言ったことへの感想。

コ、「此一人之身・・・」に見られる気持。

サ、「於是、数千金・・・」とした理由。

## 【終結】

⑨合従のその後について調べたことを発表。

⑩教師の評価。次時の予告。

## (2) 質疑応答の実際

次に、後半部の質疑応答の部分を掲げる。

## (前略―渡辺注)

F えーと、最初の方の「妻不下機、嫂不為炊。」のところには、妻と兄嫁のどんな気持があるの  
のでしょうか。

S<sub>3</sub> それはやはり軽蔑していたのだと思います。あちこち放浪して家のことも考えずにいるの  
だから、それ見たことかというような気持だと思います。

S<sub>2</sub> 奥さんや兄嫁というような身内の者でも蘇秦の偉大さがわからないというような、人間の  
本当の値打ちはなかなかわかってもらえないような姿だと思いました。

F 次に「昆弟妻嫂……俯伏侍取食。」にはどのような気持があるのでしょうか。

S<sub>4</sub> 軽蔑していたのに、すごい地位とすごい金持ちになって帰ってきたので驚いてしまってい  
るのだと思います。

S<sub>5</sub> こんなに偉くなるんだったら、もっと大事にしておいたらよかった(笑い)とか、馬鹿にし

ていたのに偉くなったので、<sup>⑦</sup> やっぱり驚いているのだと思います。

S<sub>6</sub> 兄弟や妻や兄嫁たちは、蘇秦のやっていることがそれほどすばらしいことは思っていないなかつたと思います。口先三寸で言いたいことを言っているだけだと思っていたのに、それが天下をまとめるような大きな仕事をしたので、そんなことさえも分からなかった。自分たちを恥じているのだと思います。

S<sub>7</sub> 僕は、恥じているところまではいっていないと思います。軽蔑し、馬鹿にしていたのに、偉くなつたので恐れて、どうしたらよいのかとオロオロしているのではないかと思えます。

F では次に、<sup>⑧</sup> 蘇秦が「何前倨而後恭也。」と言うと、兄嫁が「見季子位高金多也」と言いましたが、<sup>⑨</sup> ここがいちばんおもしろいなアと思いました。皆さんはどうですか。

S<sub>8</sub> この兄嫁は正直な人だなアと思いました。(笑い) 僕だったら、こう思っているとしても、ちがつたことばでごまかすんですけど。(笑い) でも、<sup>⑩</sup> この気持が人間の本当の姿だと思うけれど、ちよつとさみしくなります。人間の地位とか金とかで、その人間の価値を判断するというのは、<sup>⑪</sup> 一つの時代もそうなんですけど、奥さんや身内の人も、地位や金で動くようで、少しいやです。(後略・傍線・番号は、渡辺による)

(『漢文の教え方―指導・実践の方法―』一六四・一六五頁)

授業を振り返り、佐野泰臣氏は、「実際は、途中でもたつき解釈も二度程やらせたり、意見が出ずに待つ時間が多かったりで、一時間の授業のぎりぎりまでかかった。」(注18)と述べている。質疑応答における質疑

事項は、グループで考えたものである。①の質問に対して、S<sub>3</sub>は、傍線部②③のように答えている。④は、直接①に答えないで、そこに人間の一つの姿を読み取り、答えたものである。⑤の質問に対して、⑨は、⑧の読みを否定し、⑥⑦の「驚き」という読みに対し、「恐れて」「オロオロしている」ととらえ、読みの適切さを加えた。⑩の問いかけに対しては、生徒は⑪のように答えている。「人間の本当の姿」を普遍化してとらえた上で、「さみしくなります」と消極的ではあるが、批判的な思いを付け加えている。この応答の⑫の表現をとらえ、佐野泰臣氏は、「ということとは、きみもこんな情景というか、こんな姿を何かで見たことがあるのですか。」と、現代生活に重ねてとらえさせることを試みている。この応答を受けとめて、グループのFは、「いつの時代も人間は変わらないと思うと、この文には本当にドキッとします。」と述べている。

以上、歴史的教材の授業を、「鶏口牛後」に見てきた。この授業は、ア、十分な教材研究を行った上で、イ、「本来の授業形態は、生徒自身が読み、解釈し、まとめるという方向が正しいと思われる。」という授業観に立ち、ウ、生徒グループによる、エ、先述の漢文指導に関する①時代的背景、②文意把握、③解釈、④鑑賞の四つの留意点をほぼ押さえた授業を行い、オ、質疑応答により理解を深め、普遍的な人間性を読み取ることをとおして、カ、おそらくは生徒に漢文に対する興味・関心を高めたといえる点に特色を見出すことができる。

## おわりに

佐野泰臣氏の漢文教育について著書を中心に考察した。考察したことをまとめると、次のようになる。

## 1 漢文観

漢文は、日本文化の源流・日本人の心情や精神の背骨であるとともに、重要な古典、記録を残すための手段であり、高い文芸性を備えてもいるとする。

## 2 漢文教育観

日本や中国の過去と現在の言語・文化・思想などを正しく理解、把握し、豊かな心を育ててゆくために、漢文に対する知識や教養が必要となる。また、思考力・批判力を陶冶し、心情を豊かに育て、人間のあり方・生き方、政治、国家、教育の課題に指針を与え、今後の文化の創造を可能にするとしている。受験や競争の波にのまれがちで、自己を見失うことの多い生徒たちの、人間形成の糧とすべく、漢文を新しい時代に即応した、生徒たちが主体性をもって取り組み、自ら学ぼうとする心を育てる科目に蘇生させたいと考えていた。

## 3 漢文教育の現状把握

①教育課程の改訂による漢文軽視が教師と生徒の漢文への低調な意識を生み出したとした。また、②漢文の、平面的で静的な、講義式一辺倒の旧態依然とした授業は、高校生の漢文への意欲を失わせるばかりか、高校全入時代を迎えた時代に合わないと批判した。さらに、③意識調査により、生徒・保護者の意識が予想以上に低いことを把握し、漢文教育の現状克服のため 漢字・漢語に対する生徒たちの抵抗感の除去、新しい指導方法の確立、学校全体での取り組み、中・高漢文教育の連携、作文・読書指導との関連指導、時間数不足の克服、の六点を提示した。

## 4 漢文教育の方法

本来の授業形態は、生徒自身が読み、解釈し、まとめるとい方向が正しいとして、現代文で行われてい

る形態や方法を取り入れた。①グループ討議（学習）による指導、②発表方式による指導、③視聴覚機器の利用による指導、④放送教材の利用による指導、⑤課題学習による指導、⑥自主ゼミ方式及び輪読会による指導の六つの方法である。これらは、現代文で行われている形態や方法を取り入れたとしているが、次第に取り入れられるに至った当時の古文教育の方法に連動している。他に、漢文学習につながる学習活動への学校全体での取り組み、社会科（倫理社会・日本史・世界史）との協力、必修クラブの利用、中学校と高等学校の連携、漢文と読書指導・作文指導との関連指導など、幅広く漢文教育を模索し、可能性を追求している。

## 5 授業の実際

授業は、十分な教材研究を行った上で、本来の授業形態は、生徒自身が読み、解釈し、まとめるという方向が正しいとする授業観に立って行われた。生徒グループによる、時代的背景、文意把握、解釈、鑑賞の四点をほぼ押さえた授業を行い、質疑応答により理解を深め、普遍的な人間性を読み取ることとおして、おそらくは生徒に漢文に対する興味・関心を高めたといえる点に特色を見出すことができる。

注1 佐野泰臣氏『漢文教育考―その指導と実践―』（一九七八年一月二〇日（株）教育出版センター刊）

注2 佐野泰臣氏『「教え方叢書」⑫漢文の教え方―指導・実践の方法―』（一九八四年一月一五日 右文書院刊）

注3 「教育課程に反対する」（日本文学協会第二十三回大会 一九六八年六月一五日 引用は、日本文学協会編『日本文学』一九六八年一〇月号 未来社刊 七一頁）

注4 注1に同じ（「まえがき」）

- 注 5 注 2 に同じ (「はしがき」)
- 注 6 注 2 に同じ (六〇―一三頁参照)
- 注 7 注 1 に同じ (一四四頁)
- 注 8 注 2 に同じ (三頁)
- 注 9 注 1 に同じ (一七八―一九〇頁参照)
- 注 10 注 2 に同じ (三頁)
- 注 11 注 1 に同じ (一八三頁)
- 注 12 注 2 に同じ (一六頁)
- 注 13 注 2 に同じ (二七頁)
- 注 14 注 2 に同じ (二六―六七頁参照)
- 注 15 渡辺春美「戦後古典教育実践史の研究 (二四) ―『国語教育研究』誌掲載論稿を中心に―」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第五巻第二号 二〇〇一年三月五日) において考察した。
- 注 16 注 2 に同じ (「各論」に掲載)
- 注 17 注 2 に同じ (一四二・一四三頁参照)
- 注 18 注 2 に同じ (一六〇―一六六頁参照)
- 注 19 注 2 に同じ (一六八頁)
- 付記 本稿は、二〇〇一年(平成一三年)八月二五日、第一六回鳴門教育大学国語教育学会で発表した資料に加筆したものである。